

景観

一枚の写真から「日本」と「東京」を読み解く試み 日本大学文理学部社会学研究室・建築ジャーナルの展覧会とシンポジウム



1965年の計画案では、30階127mとなるはずだった前川國男設計の東京海上ビル(東京都千代田区)。ところが「美観論争」によって5階分削られ、25階100mに政治的結着して竣工したのは1974年。それから33年。今、丸の内周辺では200mのビルが3棟工事中だ。

100mしか許されなかったものがなぜ200mなのか。「日本らしさの〈核心〉」を照射する—東京駅

と丸の内と皇居と—と題したシンポジウムと第2回「東京を創る、『東京』を読む」展が小社も共催して開かれた。

主催は日本大学文理学部、社会学科の都市社会学後藤範章ゼミが企画した。

展示は「建築の表現力と社会学の想像力」をテーマに「丸の内の今昔」と「東京の今を語る1枚の写真」を並行して見せる。中でも出色は右の東京駅を中心としたパースペクティブ。11月26日のシンポジウムでは岩井光男、伊藤裕慶、多見貞子、西村幸夫、古川隆久、松橋達也、後藤範章

(司会)の各氏によって丸の内の過去、現在、未来を解き明かす試みがなされた。ちなみに下の写真はまだ未完成。東京駅の装麗なドームが復元される頃、皇居へのいちょう並木が整い、背後のツインタワーがさらにパースペクティブを強調するだろう。



建築教育

アイデアを出し合おう! 体験的学習の場を提供 日本建築家協会「建築家スタジオⅢ」ランドスケープアーキテクト韓亜由美さんの巻



新宿サーベ이에て。中央が韓亜由美さん

「強靱なコミュニケーション力を鍛える」をキャッチフレーズに日本建築家協会(関東甲信越支部)が提供する建築の実践的鍛錬の場「建築家スタジオ」。2006年度、第3学期のスタジオマスターはアーバンスケープ・アーキテクト(都市景建築

家)の韓亜由美さん。新宿のフィールドワークに加え、畠山直哉、関博紀、西村佳哲の各氏もゲストレクチャーを行った。

最終日の10月14日は「都市の眠れる

資源の価値化」をテーマに計画案を持ち寄り、講評会で締めくくった。

韓さんが出した「お題」は3つ。「コンビニのリ・デザイン」、「人生のマスターのための家具」、「歌舞伎町の再開発計画」。好きな課題を選んでアイデア

をまとめ、発表する。

身近で取り組みやすいテーマのためかコンビニ計画を選ぶ人が多かったが、どうも瞬間芸的で実現性に乏しい。かと思うと歌舞伎町再開発計画は企業が提案するような制度や採算面も考慮したリアルすぎるものに傾きがち。具体的な人物と家具を結びつけるという課題そのものは面白いが、日頃からアンテナを張っていないと難しい。大野秀敏実行委員長からも思わず檄が飛ぶ。コミュニケーション力強化の道のりは厳しいと感じさせた講評日だった。